

平成 30 年度 第 2 回北関東救急看護研究会

発表概要

テーマ： 救急外来におけるデスカンファレンスの検証

－看護師のグリーフケアに対する困難感を調査して－

話題提供者

所属： 済生会宇都宮病院

氏名： 茂呂 瞳

はじめに、A 病院の救急外来では、家族や付き添い者が正常なグリーフワークが行えるようグリーフケアを実施し、デスカンファレンスを行っている。しかし、カンファレンス後、看護師が感じた困難感がどのように変化したか不明確だった。そこで、困難感をカテゴリーごとに数値化し、困難感の程度を調査したいと考えた。また、カンファレンス実施前後で困難感の変化の有無を検証し、デスカンファレンスの効果を明らかにすることを目的とした。

方法として、質問紙法で調査を行い、看護師がグリーフケアの際に感じた困難感の程度を質問項目ごとに点数化した。日本救急看護学会クリニカルラダーに基づき、救急外来経験年数別に 3 年未満を A 群、3 年以上の看護師を B 群の集団に分け、カンファレンス前後で平均値を比較した。

結果は、全症例において、[家族や付き添い者との関係性がなく、短時間での関わりが難しい]の平均値が最も高かった。これは治療の選択など意思決定に際し、時間的余裕がない救急患者の特殊性を表した結果であると考えられる。次に A 群 B 群を比較すると、A 群ではカンファレンス後に困難感が減少傾向であったのに対し、B 群では[患者家族や付き添い者の必死な思いへの対応が難しい][治療の継続があきらめきれない患者家族や、付き添い者への対応が難しい][継続的なグリーフケアが必要だが、機会がない][グリーフケアの効果が分からない]の 4 項目で困難感が増加した。A 群では、カンファレンスが効果的に実施され、参加者の意見やアドバイスにより自身のグリーフケアに対して課題を見だし、成長の機会となり、困難感が軽減したのではないかと考える。B 群では、与えられている役割意識から、家族や付き添い者に対して経験をもとに個別性のあるグリーフケアを実践しているため、困難感が増加したと考える。今後は、看護師それぞれが感じた課題を解決していくことで、困難感の軽減につなげたいと考える。今回の研究では、デスカンファレンスの効果を有効な数値では表すことはできなかったが、今後はカンファレンスの内容を充実させ、グリーフケアの質を高めていく必要があると考える。

※本研究は、第 20 回日本救急看護学会学術集会で発表した内容である。